

こ いた い はす わ
小板井蓮輪遺跡 3

—福岡県小郡市小板井・稲吉所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書 第273集

2013

小郡市教育委員会

こ いた い はす わ
小板井蓮輪遺跡 3

—福岡県小郡市小板井・稲吉所在遺跡の調査報告—

小郡市文化財調査報告書 第273集

2013

小郡市教育委員会

序

本書は、小郡市小坂井における集合住宅建設に先立ち、小郡市教育委員会が実施した小坂井運輪遺跡3の発掘調査の記録です。

今回の調査は、範囲の限られた小規模なものではありますが、古墳時代から古代にかけての集落跡や近世の溝の一部が発見され、小坂井地区周辺のみならず小郡市の歴史を探る上で新たな資料を加えるものとなりました。

残念ながら遺跡は開掘によって消滅しましたが、この調査の成果が、今後ふるさと小郡の文化財に対する市民のみなさまのご理解につながり、学校・社会教育や学術研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に当たっては地元小坂井・稲吉地区の皆様には深いご理解とご協力を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

平成 25 年 3 月 29 日
小郡市教育委員会
教育長 清武 輝

例言

1. 本書は、小郡市小坂井・稲吉に所在する「周知の埋蔵文化財包蔵地 小坂井運輪遺跡」地内における集合住宅建設に伴い、小郡市教育委員会が受託契約によって発掘調査を行った小坂井運輪遺跡3の調査報告書である。
2. 小坂井運輪遺跡3は小郡市稲吉字若宮 1306-1・3番地に所在する。
3. 本調査は、姫野久恵、西江幸子が担当した。
4. 本書に掲載した遺構の実測は、調査担当者が行った。
5. 遺構の個別写真及び全景写真の撮影は調査担当者が行った。遺物の写真撮影は有限会社文化財写真工房に委託した。
6. 本書に掲載している遺物の復元は、衛藤千嘉子・佐々木智子・平嶋直美・南條由美の協力を得た。遺物の実測は姫野と今村杏奈が、製図は久住愛子・白木千里が行った。
7. 本書で使用する遺構に略語として冠した記号は以下を用いている。
SC：住居跡 SB：掘立柱建物 SK：土坑 SD：溝 P：ピット
8. 図版中の遺物に付されている番号は、本文中の挿図番号に対応する。
9. 本書で使用した座標は世界測地系に拠っており、遺構図中の方位は座標北を示す。
10. 本書に掲載した遺構実測図・遺物実測図・写真は、小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管している。
11. 本書の執筆・編集は、姫野が行った。

本文目次

第1章 はじめに	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 調査体制	1
第2章 位置と環境	2
第3章 調査の内容	
1 調査の概要	5
2 遺構と遺物	5
(1) 住居跡 (SC)	5
(2) 掘立柱建物跡 (SB)	16
(3) 土坑 (SK)	17
(4) 溝 (SD)	19
(5) ビット・その他	21
第4章 まとめ	21

挿図・表目次

第1図 周辺遺跡分布地図 (S=1/25,000)	3	第10図 7号住居跡、1号掘立柱建物跡出土土器・土製品実測図 (1,2はS=1/4, 3,4はS=1/3)	14
第2図 調査区位置図 (S=1/5,000)	3	第11図 8・9・10・12号住居跡実測図 (S=1/60)	15
第3図 遺構配置図 (S=1/100)	4	第12図 1号掘立柱建物跡実測図 (S=1/60)	16
第4図 1号住居跡実測図 (S=1/40、カマド土層S=1/20)	6	第13図 1号土坑実測図 (S=1/40)	17
第5図 2号住居跡実測図 (S=1/60)	8	第14図 1号土坑、ビット、包含層出土土器実測図 (S=1/4)	18
第6図 4号住居跡実測図 (S=1/60)	9	第15図 2号土坑実測図 (S=1/40)	18
第7図 1・2・4号住居跡出土土器・土製品実測図 (1~21はS=1/4, 他は1/3)	10	第16図 1号溝出土遺物実測図 (S=1/4)	19
第8図 5・6号住居跡実測図 (S=1/40)	12	第17図 2・3号溝遺構実測図 (S=1/60, S=1/40)	19
第9図 7号住居跡実測図 (S=1/40)	13	第18図 出土土器・金属器実測図 (1,2はS=1/3, 3はS=1/2)	20
小板井運輪遺跡3 出土遺物観察表	22		

図版目次

図版1 ①小板井運輪遺跡3調査区全景 (西から)	図版4 ①5号住居跡完掘状況 (南から)
②1号住居跡カマド (東から)	②6号住居跡完掘状況 (西から)
③1号住居跡貼床検出状況 (東から)	③7号住居跡貼床検出状況 (北から)
④1号住居跡完掘状況 (西から)	④7号住居跡完掘状況 (北から)
⑤2号住居跡主柱穴検出状況 (南から)	図版5 ①8号住居跡貼床検出状況 (西から)
図版2 ①2号住居跡P-1土層断面 (東から)	②10号住居跡完掘状況 (南から)
②2号住居跡P-2土層断面 (東から)	③11号住居跡完掘状況 (東から)
③2号住居跡P-3土層断面 (東から)	④1号掘立柱建物跡P-1土層断面 (南から)
④2号住居跡P-4土層断面 (北から)	図版6 ①1号掘立柱建物跡完掘状況 (北から)
⑤2号住居跡貼床検出状況 (南から)	②1号土坑完掘状況 (北から)
⑥2号住居跡完掘状況 (西から)	③2号土坑完掘状況 (北から)
図版3 ①4号住居跡貼床検出状況 (南から)	④2号溝完掘状況 (南から)
②4号住居跡遺物出土状況 (南から)	⑤3号溝完掘状況 (南から)
③4号住居跡完掘状況 (南から)	図版7 出土遺物(1)
④5号住居跡貼床検出状況 (南から)	図版8 出土遺物(2)

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

小坂井運輪遺跡3の調査は、平成23年4月15日付で、地権者の高木英治氏より、小郡市稲吉字若宮1306-1、1306-3において共同住宅の建設に伴い、予定地内における埋蔵文化財の有無について照会・事前審査願いが出された事を端緒とする。(審査番号1105)。予定地内には既存の建物があり、建物の解体後の平成23年7月7日に申請地の試掘調査を行った。その結果、申請地内に遺構が確認されたため、この成果を基に地権者と協議を行った。その結果、建物の基礎部分が遺構面まで達する上、計画の変更もできないことから、やむをえず遺跡が破壊される部分について発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。

2 調査の経過

発掘調査は平成23年7月23日から同年9月30日にかけて実施した。現地調査期間は、連日の猛暑とゲリラ豪雨に見舞われ、厳しい天候の中での作業となった。調査の主な経過は以下のとおりである。

- 7月25日 現地および周辺の現況を確認。
- 7月28日 調査対象地の仮杭設置。
- 8月 1日 重機による表土剥ぎ開始（～2日）。調査道具および、ユニットハウス類の搬入。
- 8月 3日 作業員による遺構掘削開始。インターンシップの学生6名（高校生3名・中学生3名）が見学。
- 8月10日 測量杭の設置。博物館実習の学生2名が見学。
- 8月12日 お盆のため作業を一時中断。（～16日まで）
- 8月17日 調査再開。
- 9月27日 高所作業車による調査区全景の写真撮影。
- 9月29日 埋め戻し及び、調査道具類の搬出。
- 9月30日 調査終了。現地引き渡し。

3 調査体制

調査の体制は以下のとおりである。

平成23・24年度 小坂井運輪遺跡3 調査体制

小郡市教育委員会

教育長 清武 輝
教育部長 吉浦 大志博

文化財課 課 長 片岡 宏二
係 長 柏原 孝俊
技 師 西江 幸子（調査担当）

嘱託技師 姫野 久恵（調査・整理担当）

発掘従事者

石井 京子、草場 誠子、佐藤 照子、田中 賢二、土井 久江、芳野 智洋子（敬称略）

第2章 位置と環境

小板井連輪遺跡3(①)は小都市の中央をほぼ南北に貫流する宝満川の西岸にあたり、市北側から続く低台地の縁辺部に所在する。当遺跡東側には、埋没谷を挟んで小板井屋敷遺跡(②)が存在し、また平成21年度調査の小板井連輪遺跡2の道路(幅約5.5m)を挟んだ南東側に位置する。

小板井連輪遺跡は平成13年に1次調査(市報告:第168集)が行われ、中世の土坑や溝などが確認された。その後、2次調査(市報告:第251集)においては中世の遺構の1辺に古墳時代終末期の集落が確認され、当調査区においても同時期の遺構の広がりが予想される。

当遺跡周辺に分布する遺跡を中心に歴史的環境を時期毎に概観していく。

旧石器時代・縄文時代の遺跡は希薄ではあるが、小板井京塚遺跡(③)において片片尖頭器が確認されている。また、小郡中尾遺跡(④)、大板井遺跡(⑤)、大崎井牟田遺跡(⑥)などにおいて押型文土器が確認され、特に大崎井牟田遺跡においては石組炉に伴う出土として注目される。

弥生時代になると人々の活動が活発化する。特に小郡・大板井地域は中核集落として前期から後期にいたるまで展開する。まず前期中葉から、大板井遺跡(⑤)において貯蔵穴が多数認められ住居跡も確認されている。中期前半になると同遺跡の集落の規模が飛躍的に増大し、甕棺墓などの墓域も形成される。そのほかの中期～後期の遺跡として大崎中ノ前遺跡(⑦)、大崎遺跡(⑧)、小郡若山遺跡(⑨)、小郡遺跡(⑩)、大崎後原遺跡1・2(⑪)、小板井屋敷(⑫)、寺福童遺跡(⑬)、大崎小園遺跡(⑭)など多くの集落が確認されている。そのなかでも大崎中ノ前遺跡2(中期前半～後期初頭の集落跡)では、土坑より赤・黒漆塗り木製品や鉄など木製品が多数出土しており、注目される遺跡であろう。小板井屋敷遺跡1では中期中頃の土坑が検出され、平成23・24年度調査の同遺跡5次調査(平成25年度報告)からも同時期の遺構が確認され、周辺に集落域の拡大が予想される。大崎小園遺跡1では、中期末頃の溝が、寺福童遺跡4では銅文9本を埋納した遺構が、寺福童遺跡5では弥生時代から古墳時代まで続く墓域が確認された。

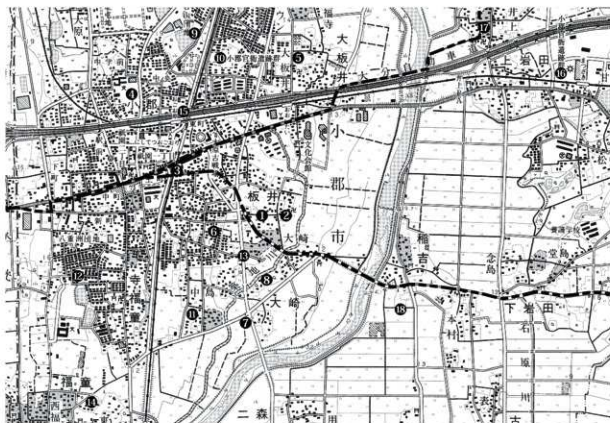
古墳時代初期から前期の遺跡として、大崎小園遺跡、小板井屋敷遺跡、大崎中ノ前遺跡、福童町遺跡(⑭)などが挙げられる。大崎小園遺跡1・3では内式系・布留式系土器といった畿内形の土器を伴った住居跡が検出され、他の地域との交流が想定される。が、一方では福童町遺跡1のように在地系の土器しか出土しない集落もある。当該期の周辺の墓域として、寺福童遺跡1があり、方形周溝墓が確認されている。中期では、小都市では小規模散在型の集落形態を成し、古墳時代後期になると集落の数が大幅に増加する。宝満川下流西岸の集落は、沖積地を望む丘陵縁辺部の開析された台地を中心として6世紀以降継続的に営まれ、東岸部と同様に7世紀初頭前後を画期として中位段丘から低位段丘上に集落域を拡大、新たな集落を展開している。

古代では、当遺跡より約1km北に御原郡衙に比定される小郡官衙遺跡(⑯)がある。コ字型に配された郡庁跡や正倉とみられる倉庫群など機能的に整然と配置し、郡衙の構造を知る上で欠く事のできない重要な遺跡といえる。関連して、小郡前伏遺跡(⑰)では郡庁に至る道路状遺構が、大板井遺跡では4×5間の総柱建物跡が3種検出されている。上岩田遺跡(⑱)では、大型の掘立柱建物が多くとその中心的な建物が基礎遺構上に確認され、その周辺からは山田寺系種先瓦や鬼板瓦が出土することから、近接して位置する7世紀末から8世紀初頭に築造された井上庵寺(⑲)に先行する寺院と見られている。

中世では、宝満川の自然堤防上に立地し、方形溝で区画された集落がある稲吉元矢次遺跡(⑳)が知られている。龍泉窯や同文窯の青磁類が多数出土している。また、当遺跡に近接する小板井屋敷遺跡からも龍泉窯系青磁が井戸から出土し、当遺跡を含めた小板井地区に中世期の集落が広範囲に広がっていることが予想される。

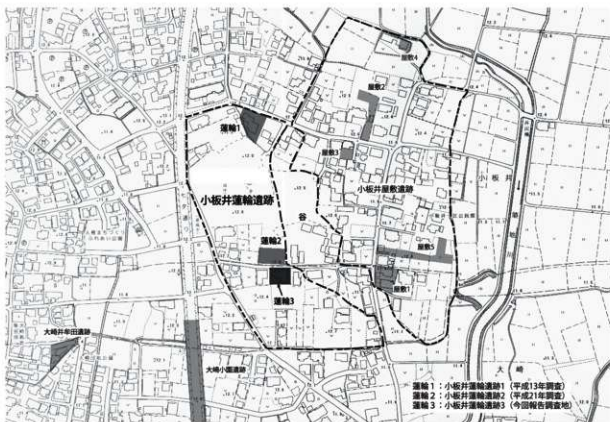
近世では、久留米から山家までの横隈街道(旧筑前街道)や、肥前田代方面から小郡・大板井・井上を経由して英彦山への参詣道として利用された彦山道など、大道(街道)や横道(小道)が小板井地区周辺においても整備されている。当該地域周辺においても、近世代の遺物や遺構が確認されていることから当時の賑わいが想像できよう。

このように当遺跡周辺は文化財の宝庫であり、当地域もその一つと数えられるものである。



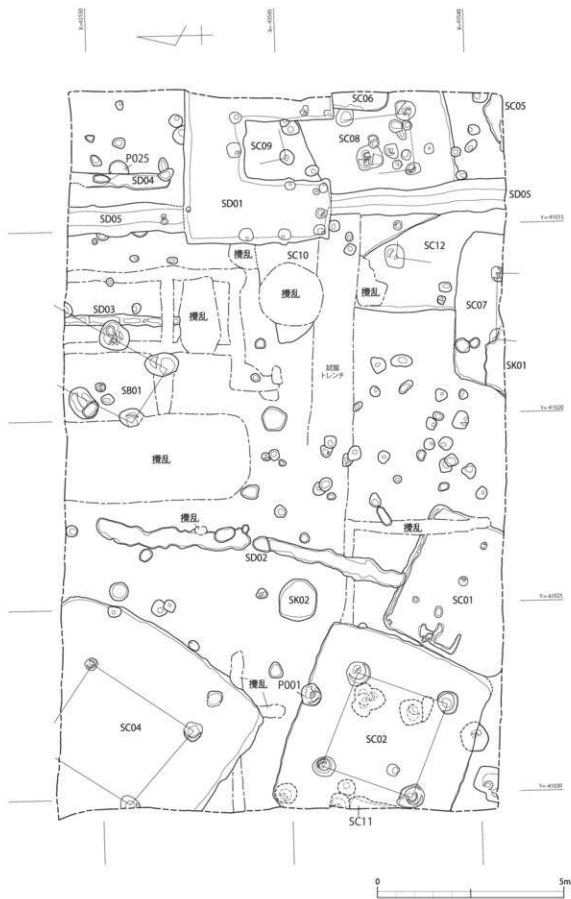
第1図 周辺遺跡分布地図 (S=1/25,000)

- ①小坂井運輪遺跡 ②小坂井屋敷遺跡 ③小坂井京塚遺跡 ④小郡中尾遺跡 ⑤大坂井遺跡 ⑥大崎井牟田遺跡
 ⑦大崎中ノ前遺跡 ⑧大崎遺跡 ⑨小郡若山遺跡 ⑩小郡遺跡、小郡官衙遺跡 ⑪大崎後原遺跡1・2 ⑫寺福遺跡
 ⑬大崎小園遺跡 ⑭福童町遺跡 ⑮小郡前伏遺跡 ⑯上岩田遺跡 ⑰井上麻寺 ⑱稻吉元次遺跡



第2図 調査区位置図 (S=1/5,000)

- 遺跡1：小坂井運輪遺跡1（平成13年調査）
 遺跡2：小坂井運輪遺跡2（平成11年調査）
 遺跡3：小坂井運輪遺跡3（今回報告調査地）



第3図 遺構配置図 (S=1/100)

第3章 調査の内容

1 調査の概要

遺跡は現地標高12.60～12.75m前後、遺構検出面で12.30m前後の低位段丘上に位置している。周辺の現況は宅地や畑地であり、緩やかに北に向けて下るような起伏が見られる。

遺構検出面は、暗茶褐色か暗黄褐色のローム層である。基本層序は上層が撥乱層、暗灰色土、暗褐色土、その下でロームの地山面となる。調査区の遺構検出面までの深さは約45～50cmを測る。

検出した遺構は、住居跡12軒、掘立柱建物跡1棟、土坑2基、溝5条、ピット群である。これらの遺構は、その多くが6世紀末～7世紀前半に属し、溝5条の内、2条が江戸時代に属するものであった。また、ピットについては帰属時期が明確でないものが大半を占めているが、概ね上記2時代のいずれかに属するものであろう。

出土遺物は、須恵器・土師器を主体とし、土製品、鉄製品、石器類も数点出土している。

2 遺構と遺物

(1) 住居跡 (SC)

1号住居跡 [第4図、図版1]

1号住居跡は調査区の南側中央に位置し、遺構の一部が調査区外南側へと広がる。上層が削平を受け、検出段階で一部貼床が露呈している状態で検出した。また、一部が現代の攪乱溝による削平を受け、2号溝に切れ、2号住居跡を切る。現況で南北軸約3.42m、東西軸約3.68m、検出標高は12.40m前後である。住居の平面形は隅丸方形を呈し、検出面から貼床面までの深さは約10cm前後、貼床は一般的な硬化をなしており、一部貼床を施していない箇所も確認できた。主柱穴は確認できなかったが、3つの柱穴を検出した。また、住居北壁下に沿って1条の小溝(幅約15cm)を検出した。小溝の西端に直径15cm前後の小穴が確認できた。貼床面の下層掘り込みはほぼ平坦で、カマド部分のみ掘り下げられている。埋土の状況は灰茶褐色土を主体とし、地山土の茶灰褐色土がブロック状に全層に混じっている。貼床構成層は地山土ブロックで構成されており、厚さは約5cmである。

カマド

住居西側でカマドを検出した。上層が削平を受けており詳細は不明な点が多いが、カマドの袖や焼土範囲などから馬蹄形を呈し、住居壁体から外へ突出しないタイプのカマドであろう。支脚は検出できなかったが、燃焼部に支脚の痕跡と考えられる窪みが確認できたことから、支脚があったと考えることができる。埋土の状況から、カマドの構成土は暗黄灰褐色で非常に硬くしまっている。また、構成土がカマド右側へ崩れその上層に住居の埋土が堆積している。

出土遺物 [第7図]

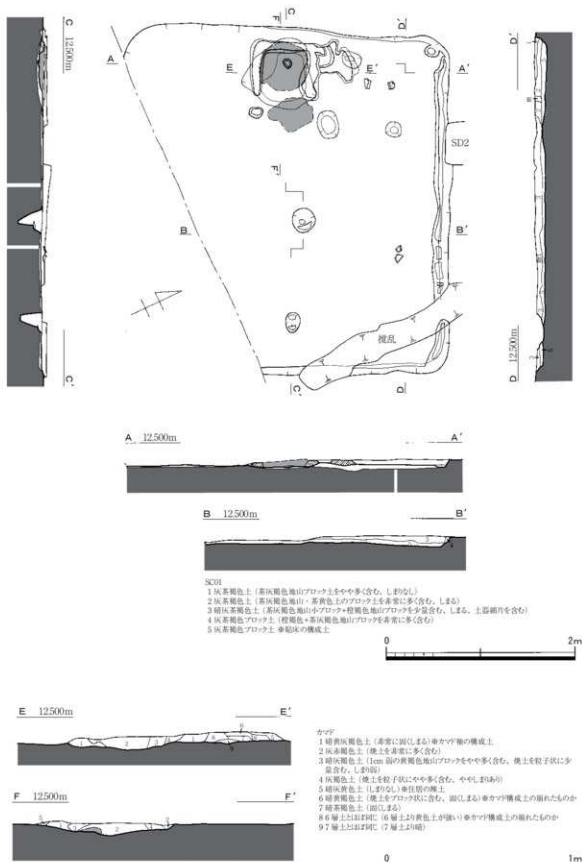
多くの遺物は貼床直上からの出土である。

1は須恵器の坏身で、器形に歪みがある。たちあがりは短く、口縁端部は欠損している。受部は水平方向にのびる。そのほか、須恵器の坏・蓋の破片、土師器の甔片などが出土しているが図化するに至らなかった。

以上のことにより、7世紀初頭から前半に比定される。

2号住居跡 [第5図、図版1・2]

2号住居跡は調査区南西に位置し、住居の一部が調査区外西側へと広がる。上層は削平を受けており、一部貼床が露呈している状態で検出した。住居跡は現代の攪乱溝によって削平を受け、P001や1号住居跡に切られる。現況で南北軸4.68m、東西軸約5.0mを測り、平面形は東西に長い長方形の隅丸方形を呈している。主柱穴はP-1からP-4の4本柱で、柱間は南北軸2.5m、東西軸2.64mで、



第4図 1号住居跡実測図 (S=1/40、カマド土層 S=1/20)

各主柱穴を結んだラインは平面形と同様長方形である。埋土の状況は不明である。貼床は、茶褐色地山土と黄褐色地山土の地山ブロックで構成され一般的な硬化をなし、厚さは10cm前後である。下層掘り込みは確認できなかったが、貼床構成土除去後の住居の掘方は平坦ではなくやや緩やかな凸凹がある。また住居の北壁下において小溝を確認した。P001に切られるが、現況で幅20cm前後、深さは2～5cm前後を測る。住居北壁に沿っていることから、住居に伴う小溝だと考えられる。また下層遺構として、大型の柱穴が検出できた。直径約60～70cmでやや楕円を呈する。

主柱穴 (P-1～P-4)

各主柱穴は直径が約60～70cmである。まず、貼床面検出段階において直径約20cm～25cmのやや楕円形をなす柱痕を検出した。また柱痕を中心として周囲でウラゴメ土と考えられる硬化土が平面で確認できた。埋土状況は、柱痕は黒褐色土・明灰褐色土でまじりではなく、ウラゴメ土は茶褐色地山土と黄褐色地山土を利用して構成し、非常に硬化である。また確認した柱痕下において地山土で構成されるやや硬化な層を確認した。

出土遺物 [第7図]

2は須臾器の坏蓋の口縁部片である。口縁部は緩やかに内傾する。他に、須臾器蓋片や、土師器の小型甕口縁部片、甕片、金属製品などが出土しているが、図化するには至らなかった。

以上のことから、6世紀末～7世紀初めに比定される。

4号住居跡 [第6図、図版3]

4号住居跡は、調査区北西隅で検出され、遺構の多くが調査区外北西側へと広がる。また遺構の一部は現代の攪乱溝によって削平を受ける。現況で南北軸約6.20m、東西軸約5.70mを測り、住居の全体形は隅丸方形であろう。検出した周辺の住居跡よりも検出段階で大型であったため、2軒の住居の切り合いと考え、東西方向にトレンチを入れ切り合い関係を確認した。結果、切り合い関係は認められず1軒の大型な住居であると判断できた。その過程で、住居の貼床面までの深さが確認できたため、貼床面までを上層と下層に分け掘削を行った。なお貼床面までは検出面より約20cm下で、検出面より約10cmで上層と下層に分けて遺物の取り上げを行った。住居北東区から焼土を検出したが、カマドを確認することはできなかった。周囲からは上層、下層にかかわらず比較的まとまった遺物の出土が確認できた。貼床面より3本の主柱穴を検出した。本来は4本柱であったと考えられるが、北西の主柱穴は住居北西が調査区外に広がるため確認することができなかった。現況で柱間南北約3.25m、東西約2.60mを測る。柱痕等は確認できなかった。住居の埋土状況は暗灰褐色土を主体とし、黄褐色地山土が粒子状に混じる。貼床構成層は茶褐色・黄褐色の地山ブロック土で構成され、一般的な硬化をなす。貼床下層の掘り込みは住居壁に沿って南側が一番深く、北側から東側へとやや深めに掘削しており、中央部分が高くなっており、「コ」の字形風の掘り込みである。

出土遺物 [第7図、図版7・8]

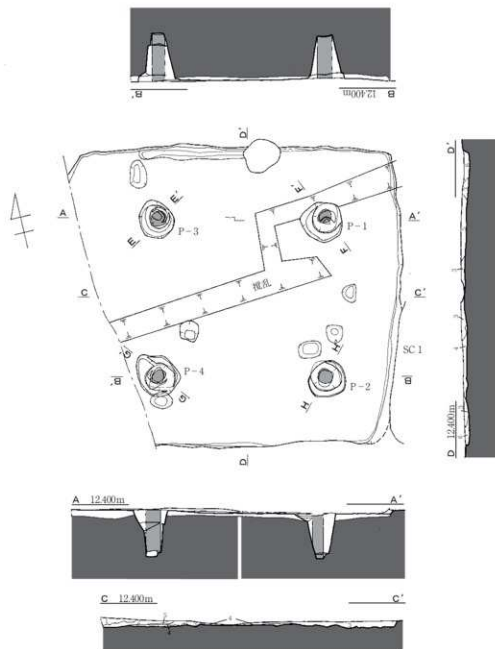
4号住居跡からは上層から下層に至るまで、多くの遺物が出土している。

・4号住居跡 上層

3、4は土師器、5～7は須臾器である。3は小型の甕である。口縁は短く外反する。内面はヘラケズリ、外面はハケム調整である。胴下半が欠損している。5は坏蓋である。口縁端部はやや外反気味である。調整は、口縁部回転ナデ、外面天井部はヘラケズリで、頂部は大きく欠損している。口径は復元径14.0cm、残存高3.5cmを測る。6は坏蓋である。口縁端部はやや外反し、天井部と体部との境に稜はなく、天井部外面にヘラ記号を施す。口径12.9cm、器高3.7cmを測る。7は坏蓋で、天井部は丸みを帯び、外面にヘラ記号を施す。口径12.2cm、器高4.2cmを測る。その他、輪の羽子なども出土しているが、図化するに至らなかった。

・4号住居跡 下層

8、9、10は土師器である。8は小型の甕で、口縁は短く緩やかに外反し、内面頸部に稜はない。調整は、内面はヘラケズリ、外面はハケ目である。10は高坏の脚部である。焼成はやや不良。須臾器高坏の模造か。11は須臾器の坏蓋である。体部と口縁部の境に稜が入り、口縁端部は直行する。口径13.0cm、器高3.6cmを測る。そのほか、穿孔のある土器片や須臾器の坏身片なども出土しているが図化するに至らなかった。



SC02

- 1 灰褐色土 (黄褐色プロットを多量含む、土砂が混)
- 2 黄灰褐色土 (混じり、多量) ※粘土の構成土
- 3 灰褐色プロット+茶褐色プロット+黄褐色プロット (非常に混じり、多量) ※粘土の構成土
- 4 茶褐色土 (灰褐色土を少量含む、混じり) ※粘土の構成土
- 5 暗灰褐色土 (1cm 位の茶褐色プロットを多量含む、混じり) ※粘土の構成土
- 6 暗灰褐色土 (褐色粒子を少量含む、混じり) ※粘土の構成土



P-3

- 1 暗灰褐色土
- 2 黄褐色土 (暗褐色土を粒子状にやや含む、土砂が混)
- 3 茶褐色プロット+明灰褐色プロット土 (混じり、多量)
- 4 暗灰褐色プロット+黄褐色プロット土 (混じり、多量)
- 5 暗褐色プロット土 (混じり、多量)
- 6 明灰褐色土 (混じり、多量)
- 7 暗褐色土 (混じり、多量)
- 8 茶褐色土 (1cm 位の黄褐色プロットを少量含む、やや混じり)



P-1

- 1 明灰褐色土 (黄褐色地山土を粒子状に混じり、土砂が混)
- 2 黄褐色土 (1cm 位の明灰褐色プロットを少量含む、多量に混じり)
- 3 黄褐色土 (明灰褐色プロットをやや含む、混じり)
- 4 明灰褐色プロット+黄褐色地山プロット (2-3cm 大茶褐色地山を少量含む、混じり)
- 5 黄褐色地山プロット+茶褐色地山プロット (やや砂質、やや混じり) ※砂が混じっている
- 6 茶褐色地山プロット+黄褐色地山プロット (混じり、多量)
- 7 茶褐色土 (1cm 位の黄褐色地山プロットを少量含む、やや混じり)



P-4

- 1 明灰褐色土 (黄褐色地山を粒子状にやや含む、混じり)
- 2 茶褐色地山プロット+黄褐色地山プロット (混じり、多量)
- 3 黄褐色プロット土 (黄褐色地山プロットを少量含む、混じり)
- 4 暗灰褐色土 (やや混じり)
- 5 暗褐色土 (混じり、多量)
- 6 黄褐色土 (茶褐色地山を少量含む)
- 7 暗灰褐色土 (茶褐色地山プロットを少量含む、混じり)
- 8 暗灰褐色土 (7層土と同様、混じり)
- 9 灰褐色土 (黄褐色地山を少量含む、混じり)
- 10 暗褐色土 (黄褐色地山を少量含む)
- 11 暗褐色土 (1cm 位の黄褐色地山プロットを少量含む、やや混じり)
- 12 暗褐色土 (1cm 位の黄褐色地山プロットを少量含む、混じり)

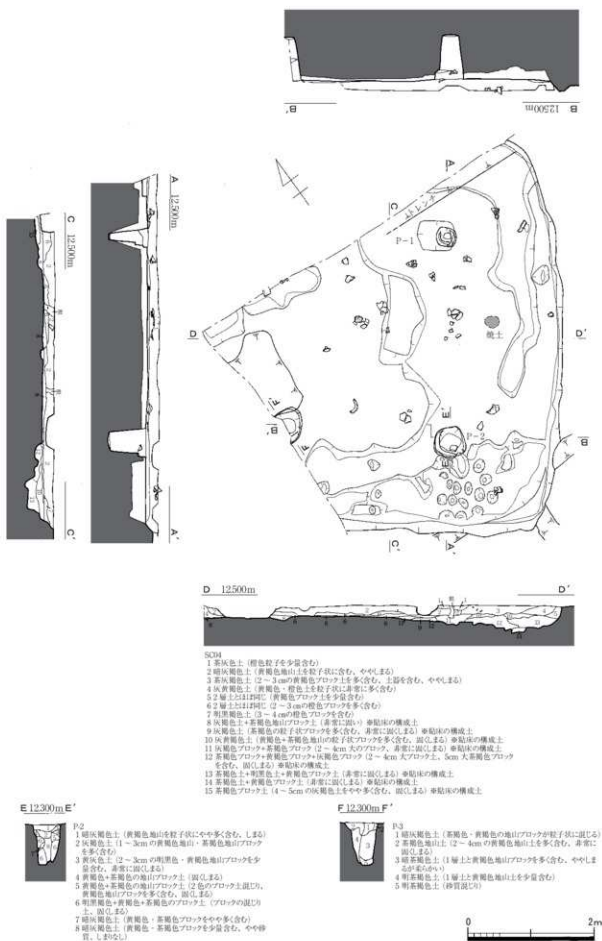


P-2

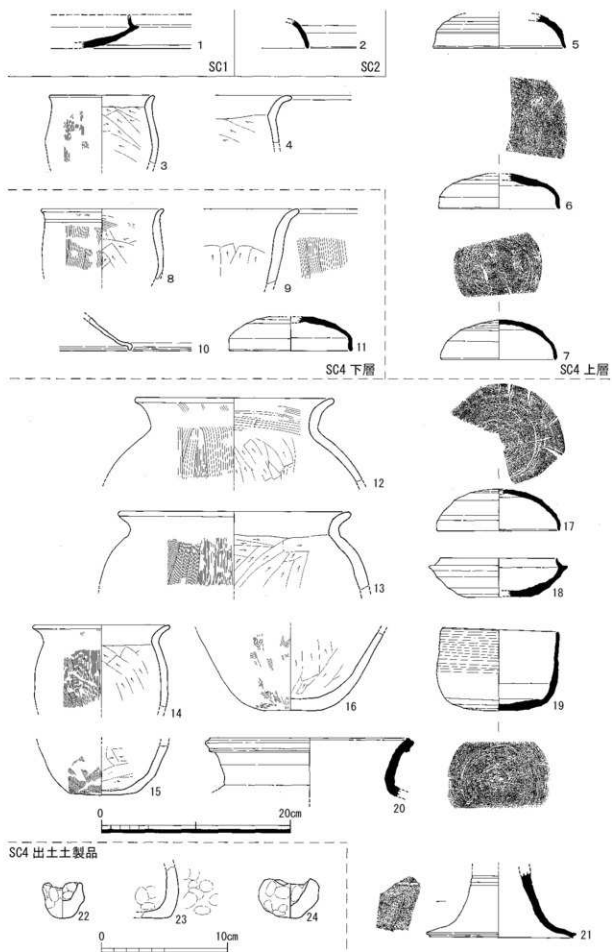
- 1 黄褐色土 (褐色土を粒子状にやや含む、土砂が混)
- 2 茶褐色地山プロット+黄褐色地山プロット (非常に混じり、多量)
- 3 明灰褐色土 (混じり)
- 4 明灰褐色土 (茶褐色地山プロットを少量含む、やや混じり)
- 5 茶褐色土 (2-4cm の茶褐色地山プロットを少量含む、混じり)
- 6 黄褐色土 (茶褐色地山を少量含む)
- 7 明灰褐色土 (やや砂質、土砂がやや混じり)
- 8 暗褐色土 (黄褐色地山プロットを少量含む、非常に混じり)
- 9 黄褐色土 (茶褐色地山を少量含む、やや混じり)

0 2m

第5図 2号住居跡実測図 (S=1/60)



第6図 4号住居跡実測図 (S = 1/60)



第7図 1・2・4号住居跡出土土器・土製品実測図 (1~21はS=1/4、他は1/3)

・4号住居跡 貼床面

12～16は土師器の甕である。12は口縁が大きく外反する。調整は、内面が口縁から頸部までハケ目、頸部から胴部にかけてはヘラケズリ、外面は口縁、胴部ともにハケ目を施す。口径は復元径で21.0cm、胴部下半が欠損し、残存高8.7cmを測る。13は口縁が短く緩やかに外反しながら立ち上がる。内面は口縁と頸部の境に稜がある。調整は内面がヘラケズリ、外面はハケ目である。復元口径24.6cm、残存高は8.1cmを測る。14、15は小型の甕である。14は口縁部が大きく外反しながら立ち上がり、胴部はやや丸みを帯びる。内面はヘラケズリ、外面はハケ目調整である。復元口径14.5cm、残存高8.6cmを測る。16は胴部上半が欠損している甕の底部である。底部はやや丸みを帯びており、体部との境に稜はない。調整は内面ヘラケズリ、外面はハケ目で底部に稜状圧痕が残る。残存高8.2cmを測る。17～21は須恵器である。17は蓋である。天井部は丸みを帯び、天井部と体部の境に稜はない。また天井部外面にヘラ記号が施されている。復元径13.0cm、器高4.35cmを測る。18は坏身である。受け部は水平方向にのび、たちあがりはやや内傾し、口縁端部はやや角張っている。復元口径12.4cm、器高4.05cm、復元底径7.3cmを測る。19は銅鉢形の埴である。外面はカキ目風の回転ナデで、底部にヘラ記号を施している。口径12.3cm、器高は8.7cm～8.4cmでやや傾く。20は甕である。口縁頸部下半が欠損する。内面調整の詳細は不明である。復元口径22.0cmを測る。21は高坏である。坏部は欠損し、脚部も端部が一部欠損している。脚部外面中段位に2条の沈線、その下位にヘラ記号を施している。脚底径は復元径で15.1cm、残存高6.95cmを測る。

・4号住居跡 その他〔第7・18図、図版8〕

22～24は手捏土器である。22は埴型の手捏土器で、口径3.1cm、器高2.8cmを測る。内外面ともに指オサエが顕著にのこる。上層からの出土である。23は内外面ともに指オサエが顕著であるが指オサエ後ナデを施している。下層からの出土である。24も埴形で、口径約3.2cm、器高3.1cmを測る。貼床面下層からの出土である。そのほか砥石や金属製品については後述する。

以上のことにより、4号住居跡は6世紀末から7世紀前半に比定される。

5号住居跡〔第8図、図版3・4〕

5号住居跡は、調査区南東隅で検出した。残存状態が悪く、検出段階で土坑と考え掘削を行っていたが、貼床と考えられる硬質な層が確認できたため、貼床を持つ住居であると判断した。住居の大半が調査区外へと広がり、上層と西側の一部が攪乱によって削平を受けていたため詳細は不明である。住居の平面形は、検出した箇所が住居のちょうど角の部分にあたるため方形であろう。埋土の状況は灰褐色土を基本とする。貼床の構成層は黄褐色地山土を基本として一般的な硬化をなす。貼床下層の掘り込みは調査区外へと広がるため不明だが、南側に掘り下がる可能性がある。

出土遺物

土師器の坏などが出土したが残存状況が悪く図化することができなかった。時期は6世紀末から7世紀初めに比定されよう。

6号住居跡〔第8図、図版4〕

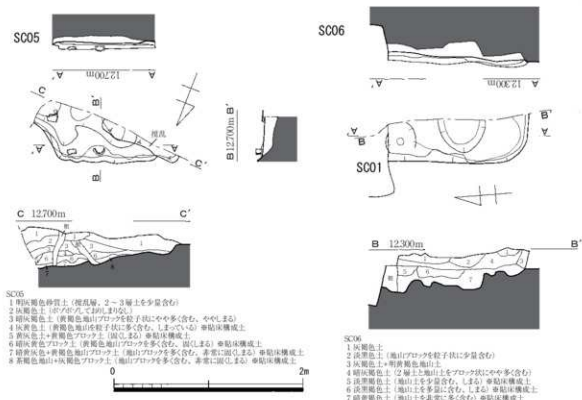
6号住居跡は、調査区東側に位置し、住居の大半が調査区外へと広がる。北側は1号溝によって切られ、また8号住居跡を切る。上層は近代に削平を受けており詳細は不明である。住居の形は方形であろう。埋土状況は灰褐色土を基本とし黄褐色地山土をブロック状に少量含む。貼床構成層は一般的な硬質で黄褐色地山土と淡黒褐色土が混ざる。

出土遺物

遺物は出土しなかったが、住居の時期は、8号住居跡との切り合い関係から考えて、8号住居跡と同時期から後続する時期だと考えられる。

7号住居跡〔第9図、図版4〕

7号住居跡は調査区南側で検出され、住居の半分が調査区外南側へと広がる。また住居西側は1号土坑によって切られるため残存状況はあまりよくない。現況で南北軸約4.0m、東西軸約1.4mを測る。平面形は隅丸方形であろう。住居の東側半分が削平を受け一部貼床が露呈しており、埋土状況は不明で



第8図 5・6号住居跡実測図 (S=1/40)

ある。なお検出面から貼床面までは5cm弱である。検出した主柱穴は2本で、いずれも柱穴一部が調査区外南側へと広がる。柱間は東西軸で約1.8mである。P-1は一部が1号土坑に切られるため詳細不明である。P-2は、柱痕は検出できなかった。下層掘り込みは南側から北西側へと掘り込まれている。

出土遺物 [第10図、図版7]

1、2はいずれも貼床面からの出土である。1は土師器の甕である。胴部は頸部へかけてやや直立気味に立ち上がり、口縁部は短く外反する。内面調整はナナメ上方向へのヘラズリで、外面はハケ目で、口縁部にも施されている。全体的に磨滅が著しい。2は須恵器の坏蓋である。頂部のヘラ切り離し痕は未調整で、中心が少し窪む。天井部の器壁は薄く、体部にむかって厚みをもつてくる。天井部と体部の境はなくやや丸みを帯び、口縁端部はやや外反気味である。天井部外面にヘラ記号を施している。口径は12.5cm、器高3.5cmを測る。他に貼床下層より、内面ヘラズリで外面ハケ目調整を施す土師器の甕や、土師器坏片、須恵器の坏身、坏蓋片などが出土しているが、図化するには至らなかった。

以上のことより、6世紀末頃から7世紀初頭頃に比定される。

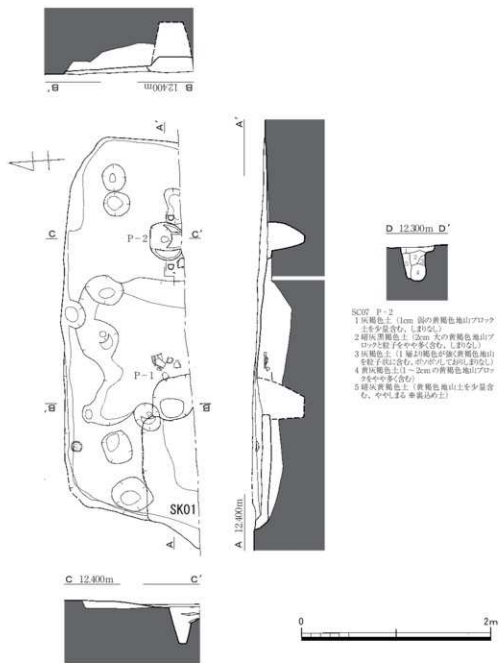
8号住居跡 [第11図、図版5]

8号住居跡は調査区東側で検出され、住居の大半が調査区外へと広がる。9・12号住居跡を切り、近代の溝である1・5号溝、6・7号住居跡に切られるため、残存状況はあまり良くない。また、攪乱によって上層および住居の一部が削平を受けており、貼床面が一部露呈している状態で検出した。現況で南北軸約3.80m、東西軸は約3.80mを測る。住居形は検出状況から考えて方形であろう。埋土状況は不明である。貼床面は一般的な硬化をなし、貼床構成層はやや厚く20cmから浅いところでも10cm前後である。また北側へむかい浅くなっていく。主柱穴は貼床面より3本確認できた。柱痕は確認できなかったが、土層観察において黄褐色・茶褐色の地山土を主体としたウラゴメ土を確認した。

出土遺物

出土遺物は少なく土師器の甕破片や、須恵器甕の破片などが出土したが、図示するには至らなかった。いずれも柱穴からの出土である。時期は7世紀初頭から7世紀前半に比定される。

以上のことより、柱穴が8号住居跡に伴うかどうかは不明であるが、8号住居跡の時期は周辺で検出された住居との切り合い関係から7世紀初頭頃と比定できよう。



第9図 7号住居跡実測図 (S=1/40)

9号住居跡〔第11図〕

9号住居跡は調査区東側で検出された。住居の大半が周辺の遺構(1・5号溝、6・8号住居跡)に切れ、残存状況は極めて悪く、平面形は不明である。埋土状況は、上層及び貼床が削平を受けており、詳細は不明である。現況で検出した住居の貼床は露呈しており、貼床構成土は浅く5cm前後で、部分的に地山が確認できる状態であった。主柱穴は確認できなかった。なお、8・9号住居跡の切り合い関係は、8・9号住居跡を切る柱穴及び、1号溝の壁面で確認した。結果、9号住居跡は8号住居跡に切られると判断できた。

出土遺物

出土遺物は少なく、土師器の破片のみである。時期を判断できる遺物の出土はないが8号住居跡とほぼ同じ時期かやや古いと比定される。

10号住居跡 [第11図、図版5]

10号住居跡は調査区東側に位置し、貼床面が露呈している状態で検出した。住居の大半が1号溝に切られ、攪乱によって削平を受ける。残存状況は極めて悪い住居である。貼床は一般的な硬化をなし、貼床構成層は5cm～10cm前後である。住居形は現況でやや不定形なため台形を呈すると思われる。下層掘り込みは西から東側へ掘り下がる。

出土遺物

出土遺物は少なく、土師器甕の破片などが出土するが、図示するに至らなかった。周辺住居との切り合い関係は不明であるが、本住居の時期は7世紀前半ごろに比定される。

11号住居跡 [第3図、図版5]

11号住居跡は、調査区西側において住居の一部のみが確認された。住居の大半が調査区外へと広がる。当初、2号住居跡の下層遺構として掘削を行ったが、結果、貼床と考えられる硬化面の一部を検出したため住居とした。住居形は残存状況が極めて悪いため不明であるが、おそらく方形であろう。埋土状況は不明。貼床構成層の厚みは、一部でしか確認できなかったが5cm前後であろう。

出土遺物

出土遺物はわずかで、土師器の破片などがあるが、図示するに至らなかった。本住居の時期は、2号住居跡との切り合い関係によりほぼ同じ時期かそれよりも古い6世紀末以前に比定されよう。

12号住居跡 [第11図]

12号住居跡は調査区の中央より南東側に位置する。検出した住居の大半は攪乱によって削平される。また周辺の遺構（1・5号溝、7・8号住居跡）によって切られるため、残存状況は極めて悪く、貼床が露呈している状態で検出されたため、詳細が不明な点が多い。現状で貼床の構成層は浅く5cm前後である。支柱穴は確認できなかったが、貼床除去後、柱穴が確認できた。おそらくこの柱穴が支柱穴であろう。なお下層掘り込みは不明である。

出土遺物

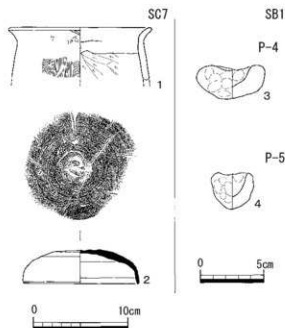
検出した柱穴より土師器の破片が出土したが図示するに至らなかった。時期は、周辺遺構との切り合い関係及び7号住居跡との切り合い関係より、7号住居跡より古く6世紀後半以前に比定される。

(小結)

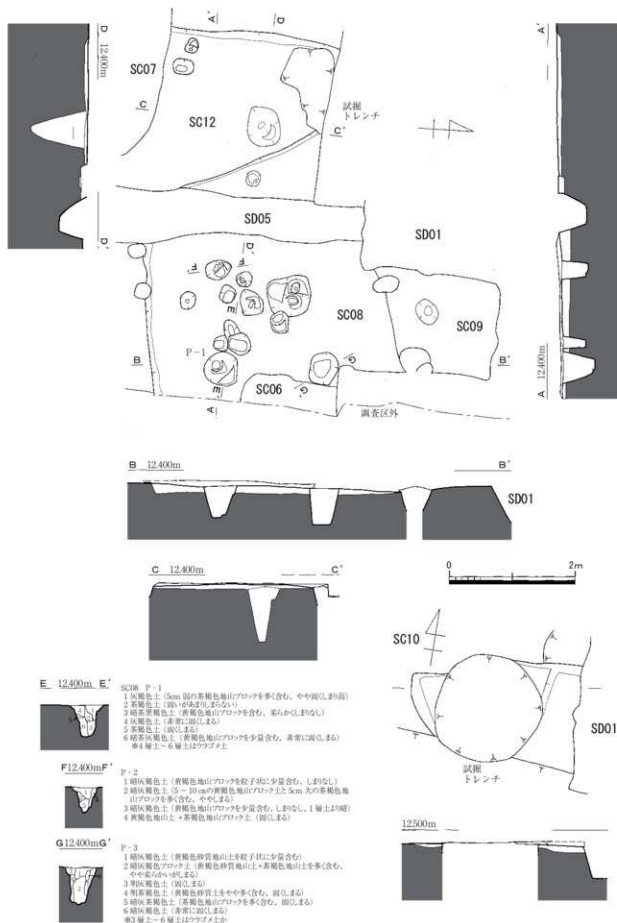
以上、12軒の住居跡を検出したが、報告できた住居跡は11軒である。3号住居跡は、検出段階では1号住居跡を切る形で検出。残存状況が極めて悪く、雨天後の精査の段階でプランが不鮮明となり記録を取ることができなかった。また、調査区南壁の土層を精査したが、上層が削平を受けていることもあり、確認することができなかった。住居跡であったかどうかは不明であるが、ここで報告しておく。

その他の住居跡を竪穴式住居跡として報告したが、1・2・4・7号住居跡以外はいずれも残存状況が悪く、全体の形は不明なものが多かった。特に、6・8～10・12号住居跡は残存状況が悪く、住居プランについては周囲の住居の状況や、支柱穴からの推測になる。すべて住居跡の時期は多少の差異があるが概ね6世紀末から7世紀初頭に比定される。なお、カマドが検出できた住居は1軒のみである。

検出した住居跡で注目すべき住居は4号住居跡であろう。他の住居の規模が4m前後であるのに対して、4号住居跡に関しては6mを超える大きさである。下層の掘り込みについても「コ」の字風に掘り込まれ、住居南側においては直径が10～15cmの小穴が数多く確認できたことも、他の住居とは差異を感じる。また、出土遺物も輪の羽口が出土している点から見ても、他の住居との性格に違いがあると考えられる。



第10図 7号住居跡、1号掘立柱建物跡出土土器・土製品実測図
(1, 2はS=1/4、3, 4はS=1/3)

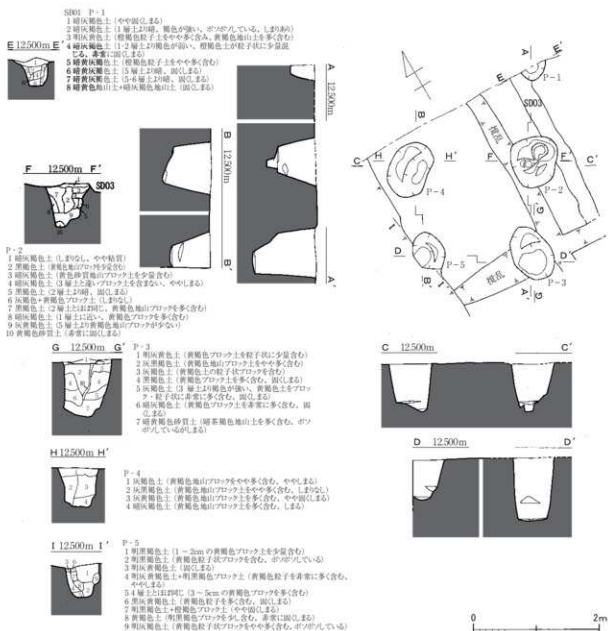


第111図 8・9・10・12号住居跡実測図 (S=1/60)

(2) 掘立柱建物跡 (SB)

1号掘立柱建物跡 [第12図、図版5・6]

1号掘立柱建物跡は調査区中央北側に位置し、一部が調査区北側へと広がり、西側は攪乱によって削平される。また、一部の柱穴が3号溝を切り、一部が攪乱溝によって削平を受ける形で検出した。現況で、南北2間(約1.5m)×東西1間(約1.8m)である。主軸はN-30°-Wである。P-1~P-5の柱穴は長軸約90cm、短軸約60cmの楕円形を呈し、検出面から柱穴底面まで深さ80cm~1mを測る。柱抜き取り痕はP-3、P-5より確認できた。西側は攪乱によって大きく削平を受けているため不明だが、建物が西側に展開する可能性がある。



第12図 1号掘立柱建物跡実測図 (S=1/60)

出土遺物〔第10図、図版8〕

3、4は埴形の手捏土器である。3はP-4からの出土である。口径5.4cm～4.0cm、器高2.7cmを測り、やや楕円形を呈する。内外面ともに顕著に指オサエの痕跡が残る。他にP-4からは、須恵器の蓋や土師器甕の破片などが出土しているが、図化するに至らなかった。4はP-5からの出土である。口径が一部欠損するが、口径3.3cm、器高3.9cmを測りやや小ぶりである。他に土師器甕の胴部片や坏などが出土しているが、いずれも図化するにいたらなかった。他にP-1～P-3において、土師器の細片や須恵器片などが出土しているが、いずれも図化するに至らなかった。

以上のことより、1号掘立柱建物跡は7世紀初頭頃に比定される。

(3) 土坑 (SK)

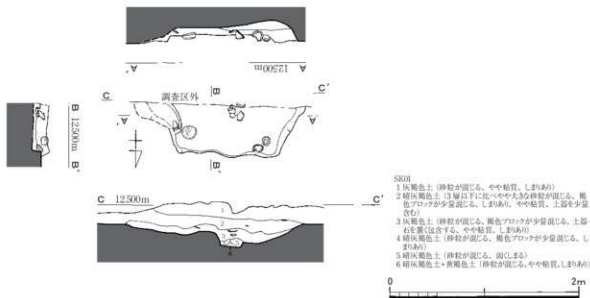
1号土坑〔第13図、図版6〕

1号土坑は調査区南側中央、1号住居跡の東側約3mに位置し、7号住居跡を切るかたちで検出した。大半が調査区外南側へと広がるため全形は不明である。現況で東西約1.80m、深さ約20cmを測る。土坑の形は不定形だがやや楕円形を呈すると考えられる。埋土状況は暗灰褐色土を基本とし、各層に砂粒が含まれる。1・2層は、包含層である。調査区南東側において表土剥後の検出段階で厚さ約10cm前後堆積していることが本土坑掘削時に判明した。詳細は後述する。

出土遺物〔第14図、図版7・8〕

1～4はいずれも須恵器である。1は坏蓋である。天井部に丸みを持ち、体部との境に稜はない。口縁部はやや外反気味で端部は丸みを帯びている。口径は復元径で約12.6cm、器高は4.5cmを測り、全体的に薄手である。2は坏身である。たちあがりは短くやや内傾し、受け部は上外方にのびる。器高は4.1cm、口径11.35cmを測る。外面調整は回転ヘラケズリ、および回転ナデである。体部と底部の境に稜はなく、外面にヘラ記号を施している。4は短頸壺である。頸部は短く外反し、口縁端部はやや角張っている。肩部から体部にかけて、稜はなく丸味を帯びている。また、底部は丸く安定性はない。口径5.55cm、器高7.45cmを測る。

以上のことより、本土坑は7世紀初頭から7世紀前半と比定される。



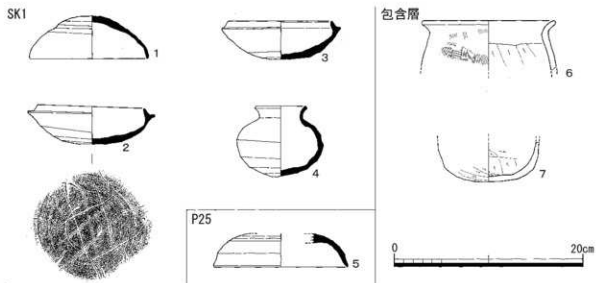
第13図 1号土坑実測図 (S= 1/40)

2号土坑〔第15図、図版6〕

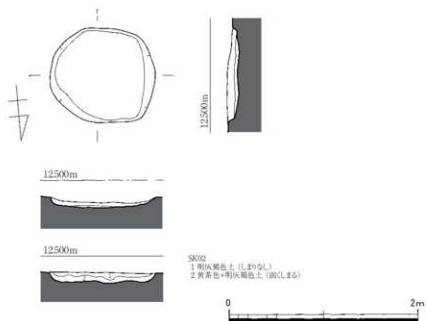
2号土坑は調査区中央、2号溝の東30cm、1号住居の北2m、2号住居の北東付近に位置する。現況で南北軸約1m、東西軸約1.10mを測る。遺構の深さは検出面より約10cm下と浅い。

出土遺物

出土遺物は土師器の細片のみで、図化不能である。時期は6世紀末から7世紀初頭であろう。



第14図 1号土坑、ピット、包含層出土土器実測図 (S=1/4)



第15図 2号土坑実測図 (S=1/40)

(4) 溝 (SD)

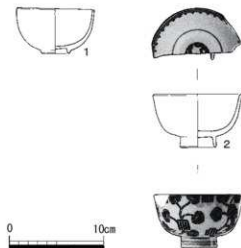
1号溝 [第3図]

近代の遺構ではあるが、性格が不明のためここで報告する。なお断面形から、溝であると考えた。

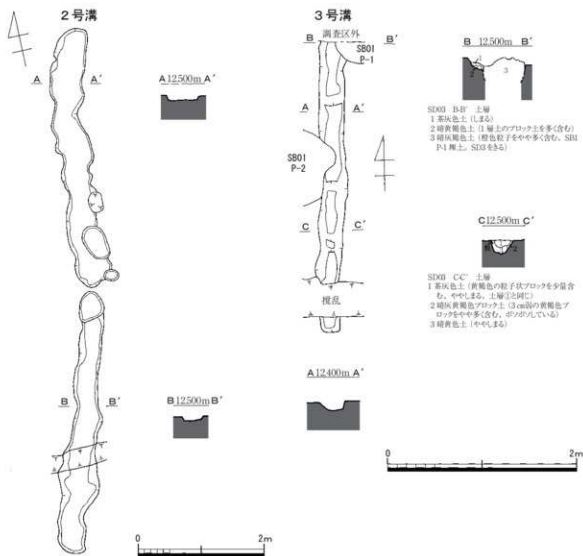
1号溝は調査区東側に位置し、調査区外東側へ広がる。また、5号溝や6・8～10号住居跡を切る。現況で、幅約1.6m、深さ約60cmを測る。溝の底面はほぼ平坦で、壁は底面から垂直に立ち上がる。全体形は東側が調査区外へと広がるため不明であるが、逆「コ」の字形である。また壁面に沿うかのように、柱穴状のピットが検出されたが下層遺構であろう。

出土遺物 [第16図、図版8]

1は、染付小丸形碗である。外面は格子地に菊花ちらしで、口径8.2cm、器高4.8～4.6cm、高台径3.0cmを測り、やや歪みがある。2は、染付小碗である。復元口径9.4cm、器高5.6cm、高台径は復元で3.8cmを測る。その他に出



第16図 1号溝出土土器実測図 (S=1/4)



第17図 2・3号溝実測図 (S=1/60, S=1/40)

土遺物として染付小皿片や、碗片などがあるが図化するに至らなかった。

以上のことにより時期は19世紀前半と考えられる。

2号溝〔第17図、図版6〕

2号溝は調査区のほぼ中央、4号住居跡の東側1.5mで南は1号住居跡を切る。また、1号掘立柱建物跡から西へ2.5mに位置する。南北に延びる溝である。底面は凸凹である。現況で幅約50cm、深さ10cm前後、全長約8.3mを測る。

出土遺物

出土遺物は、土師器の甕、坏などがあるが、いずれも細片のため図化するに至らなかった。時期は1号住居跡を切るため、7世紀初頭以降に比定されよう。

3号溝〔第17図、図版6〕

3号溝は調査区のほぼ中央、1号掘立柱建物跡に切られ、北側は調査区外へと広がる。南北に延びる溝である。ただし、北側は削平を受けており不明である。現況で幅約30cm、深さ約10cm、南北約3.1mである。

出土遺物

出土した遺物は須恵器の甕破片など数点で、いずれも図示することはできなかった。時期は1号掘立柱建物跡に切られるため、7世紀初頭頃以前であろう。

4号溝〔第3図〕

4号溝は調査区北東で検出され、北側は調査区外へと広がる。現況で幅50cm前後、深さ約5cm、南北2.6mを測る。またP025を切る溝である。

出土遺物

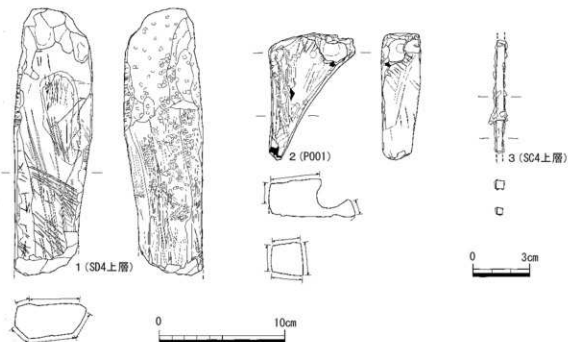
土師器の甕・坏破片が出土したのみである。いずれも図示することはできなかった。時期は不明だが、P025を切るため、7世紀初頭から前半以降の溝であろう。

5号溝〔第3図〕

5号溝は調査区東側、南北に縦断する溝で、1号溝の次に新しい溝である。南側上層は削平を受けている。現況で幅約50cm、深さ60cm前後を測る。

出土遺物

多くは陶磁器類の小破片や、瓦片などである。時期は近世であろう。



第18図 出土石器・金属器実測図 (1, 2はS=1/3, 3はS=1/2)

(5) ビット・その他

ビットとして掘削を行った小穴は多く、そのうち遺物の出土した小穴は32個である。出土した遺物の多くは、土師器片などである。そのうち、以下のビットから図示可能な遺物が出土したので報告する。

P025〔第3図〕

P025は調査区北東隅に位置し、4号溝に切られるかたちで検出した。直径は50cm前後であろう。柱穴は浅く5cm前後、埋土状況は不明である。

出土遺物〔第14図〕

5は須恵器の蓋である。口径は復元径で14.2cm、残存高3.5cmを測る。口縁端部は丸く、やや外反する。外面天井部はヘラケズリ、内面は回転ナデで調整する。

7世紀初めから前半に比定されよう。

包含層

包含層は、1号土坑および、1・5号溝掘削時に調査区南東隅で確認できた。包含層の範囲としては、1・5号溝や擾乱によって切られるため特定できなかつたが、調査区南東隅では包含層を確認できなかつた為、調査区東側中央より南から南側中央に向かい、やや舌状に広がるものであろう。

出土遺物〔第14図、図版8〕

6は土師器の甕で、復元口径14.2cmを測りやや小型。内面はヘラケズリ、外面はハケ目調整である。7は土師器甕の底部である。残存胴部径で10.7cmを測る。胴部と底部に境はなく内外面ともにヘラケズリである。

以上のことにより、7世紀前半に比定できる。

出土石器・金属器〔第18図、図版8〕

1、2は砥石である。3は、鉄鏝である。1、3は4号住居跡からの出土で、2はP001からの出土である。

第4章 まとめ

今回の調査で検出した遺構は、住居跡12軒、掘立柱建物跡1棟、土坑2基、溝5条、その他ビット多数である。多くの遺構は、調査区のほぼ全面が現代の削平を受けていることと、また多くの遺構が調査区外へと広がるため、遺構の残存状況は悪く、遺構の全体形や明確な性格付けが難しいものも含まれる。その中でも注目すべき遺構は、4号住居跡である。他の住居跡と比較しても、規模は大きく遺物量も多い、下層の掘り込みも、他の住居に比べ深く「コ」の字形に掘り込まれていると考えられる。また、金属製品や輪の羽口など他の住居からは出土していない遺物が出土していることから、他とは違った性格を持つと考えられる。掘立柱建物跡については報告した建物は1棟であるが、2号住居跡の下層遺構として大型の柱穴を検出した。検出時には2号掘立柱建物として掘削したが整理段階で精査した結果、掘立柱建物ではないと判断した。しかし柱痕やウラゴメなどが確認できたため、調査区外南側・南西側に広がる掘立柱建物の柱穴の可能性があるため、ここで報告しておく。溝については、検出5条の溝の内、2条は近現代の溝、他3条は古代の溝で、いずれも南北軸に延びる。溝幅もやや狭く、浅い。

以上のことにより、小板井運輪遺跡の南端においては小板井運輪遺跡2同様、6世紀末から7世紀前半代の短い期間に営まれた集落が存在している。新たに確認できた成果として、近現代において、何らかの開発が行われたと推測することができる。

小坂井蓮輪遺跡3 出土遺物観察表

(出土土器・土製品観察表)

成形・調整技法：外：外面 口：口縁 内：内面 底：底部

出土遺物 種類 番号	図面 番号	器種	寸法 (単位:mm)		色調	胎土	焼成	成形・調整技法	備考	
			口径	高さ						
SG1	7-1	須恵系 鉢身	-	-	(3.3)	外：灰色 内：灰白色～灰色	1～2mmの砂粒を多く含む	良好	外：面削り；不定方向のへらで口縁削り；内：面削り；面削り	磨影が著しく曇りている。底に不定方向性
SG2	7-2	須恵系 鉢身	-	-	(2.8)	外：褐色～灰白色 内：灰白色～灰白色	1～2mmの砂粒をわずかに含む	良好	外：面削り；口：面削り；内：面削り	
SG4 上層	7-3	土師系 壺	(11.0)	-	(7.2)	外：にじみ褐色～褐色 内：褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	外：へら磨削；にじみ調整不進行 口：削り；内：へら削り	
	7-4	土師系 壺	-	-	(5.0)	外：褐色～にじみ褐色 内：褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	外：削り；口：削り；内：へら削り	外面に黒染あり
	7-22 8	手づくり 土器	3.1	-	2.8	外：褐色～淡黄褐色 内：褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	外：指作り；口：指作り；内：指作り	
	7-6	須恵系 鉢身	(2.9)	-	(3.7)	外：灰白色～褐色 内：灰白色	1～2mmの砂粒を含む	良好	外：面削り；口：面削り	へら記号あり
	7-8	須恵系 鉢身	(4.6)	-	(3.5)	外：灰白色～灰白色 内：灰白色～黄灰色	1～2mmの砂粒を含む	良好	外：面削り；口：面削り；内：面削り	
	7-7 7	須恵系 鉢身	(12.1)	-	(4.2)	外：褐色～灰白色 内：灰白色	1～2mmの砂粒を含む	良好	外：面削り；口：面削り；口：面削り；内：面削り	外底部にへら記号あり
SG4 下層	7-8	土師系 高杯	(2.9)	-	(7.3)	外：褐色 内：にじみ褐色～灰褐色	1～3mmの砂粒をわずかに含む	良好	外：削り；口：削り；内：へら削り	やや不良 内：面削りか
	7-10	土師系 高杯	-	-	(3.5)	外：褐色 内：濃黄褐色～褐色	1～2mmの砂粒を含む	やや不良	内：面削りか	
	7-9	土師系 高杯	-	-	(6.0)	内外：にじみ黄褐色～褐色	1～3mmの砂粒を多く含む	良好	外：削り；口：削り；内：へら削り	外面にスス付
	7-23 8	手づくり 土器	-	-	(4.0)	内外：にじみ褐色～褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	外：指作り；内：指作り	
	7-11	須恵系 鉢身	(3.0)	-	(3.6)	外：青灰色～灰白色 内：にじみ黄褐色～灰褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	外：面削り；口：面削り；口：面削り；内：面削り	
SG4 14-7	土師系 壺	(14.5)	-	(6.0)	外：赤褐色～にじみ黄褐色 内：赤褐色～淡黄色	1～3mmの砂粒を含む	不良	外：削り；口：削り；口：削り；内：へら削り		
	7-13	土師系 壺	(24.6)	-	(6.1)	内外：褐色～にじみ褐色	1～3mmの砂粒を含む	良好	外：削り；口：削り；不定方向性；内：へら削り	
	7-12	土師系 壺	(21.0)	-	(6.7)	外：にじみ黄褐色～にじみ褐色 内：赤褐色～褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	外：削り；口：削り；不定方向性；内：へら削り	
	7-15	土師系 壺	-	7.15	(5.1)	外：にじみ黄褐色～灰褐色 内：にじみ赤褐色～濃黄褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	外：削り；口：削り；口：削り；内：へら削り	外底部に黒染あり
	7-18 7	土師系 壺	-	6.9	(8.2)	外：にじみ褐色～にじみ黄褐色 内：褐色～にじみ褐色	1～3mmの砂粒を多く含む	良好	外：削り；内：へら削り；口：削り	外表面付面にスス付
	7-24 8	手づくり 土器	3.2	-	3.1	外：褐色～にじみ黄褐色 内：褐色～灰黄褐色	1～2mmの砂粒を多く含む	良好	外：指作り；口：面削り	
	7-20	須恵系 鉢身	(22.0)	-	(6.2)	内外：灰白色	1～3mmの砂粒を含む	良好	外：工具による；口：面削り；内：指作り	内面底部に同心円状のクツキ
	7-19 7	須恵系 鉢身	(12.3)	10.8	(6.7)	外：灰白色 内：にじみ黄褐色～灰白色	1～2mmの砂粒を含む	良好	外：面削り；口：面削り；口：面削り；内：面削り；後不定方向性；内：面削り	外底部にへら記号あり
	7-17 7	須恵系 鉢身	(13.0)	-	4.3	外：灰白色～灰白色 内：灰白色	1～2mmの砂粒を含む	良好	外：削り；口：面削り；後不定方向性；内：面削り	外面にへら記号あり
	7-18 7	須恵系 鉢身	(12.6)	(4.6)	(7.3)	外：濃黄褐色～灰白色 内：灰白色～にじみ黄褐色	1～3mmの砂粒を含む	良好	外：面削り；口：面削り；口：面削り；内：面削り	
	7-21 7	須恵系 高杯	-	(15.1)	(6.6)	外：灰白色～黄灰色 内：黄灰色～灰白色	1～2mmの砂粒を多く含む	良好	外：面削り；内：面削り；削り；底部	外面にへら記号あり
SG7 10-1	土師系 壺	(15.2)	-	(5.3)	外：灰黄褐色 内：にじみ褐色～灰黄褐色	1～3mmの砂粒を含む	良好	外：削り；口：削り；口：削り；内：へら削り	外面にスス付	
	10-2 7	須恵系 鉢身	(2.5)	-	3.5	外：灰白色～灰黄褐色 内：灰白色	2～3mmの砂粒を多く含む	良好	外：面削り；口：面削り；口：面削り；内：面削り；不定方向性	外面にへら記号あり
SK1 14-4 8	須恵系 鉢身	(5.5)	-	7.4	外：灰白色～にじみ黄褐色 内：灰白色～灰白色	1～2mmの砂粒をわずかに含む	良好	外：面削り；口：面削り；口：面削り；内：面削り		
	14-1 7	須恵系 鉢身	(2.6)	-	4.5	外：灰白色～にじみ赤褐色 内：灰白色～明黄褐色	1～3mmの砂粒を含む	やや不良	外：削り；口：面削り；後不定方向性；内：面削り	磨影が著しい調整は不明
	14-2 7	須恵系 鉢身	(11.5)	2.9	4.1	外：灰白色 内：灰白色～にじみ黄褐色	1～2mmの砂粒を含む	やや不良	外：面削り；口：面削り；口：面削り；内：面削り；後不定方向性	外底部にへら記号あり かぶり径 13.65mm
	14-3 7	須恵系 鉢身	(10.9)	12.8	4.0	外：灰白色 内：灰白色	やや粗。砂粒を含む	やや不良	外：面削り；口：面削り；口：面削り；内：面削り；後不定方向性	
SB1 10-3 8	手づくり 土器	3.3	-	3.9	外：にじみ黄褐色～にじみ褐色 内：褐色～にじみ褐色	1～2mmの砂粒をわずかに含む	良好	外：指作り；口：面削り；口：面削り；内：指作り；後不定方向性		
	10-4 8	手づくり 土器	4.0 ～ 9.4	-	2.7	外：にじみ褐色～褐色 内：にじみ褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	外：指作り；口：面削り；口：面削り；内：指作り；後不定方向性	
P025 14-5	須恵系 鉢身	(14.2)	-	(3.5)	外：青灰色～灰白色 内：灰白色	1～2mmの砂粒を多く含む	良好	外：面削り；口：面削り；口：面削り；内：面削り		
SD1 16-1 8	磁器 壺	(6.2)	3.0	4.8			精良	製法	底縁は高台付	
	16-2	磁器 壺	(3.4)	(3.6)	5.6			精良	製法	底縁は高台付
包帯層	14-8 8	土師系 壺	(14.2)	-	(5.2)	外：褐色～淡褐色 内：褐色～淡黄褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	外：削り；口：削り；口：削り；内：へら削り	外面にわずかにスス付 外底部黒クツキ
	14-7	土師系 鉢身	-	6.3	(4.1)	外：褐色～灰黄褐色 内：濃褐色～灰黄褐色	1～2mmの砂粒を含む	やや不良	内：へら削り	

(出土石器・金属器観察表)

出土遺物 種類 番号	図面 番号	器種	石材	寸法 (単位:mm)				備考
				長さ	幅	厚	重	
SG4 上層	18-1	8	磁石	21.2	6.25	2.75	49.8	中央の縁部・割れに磨行痕がみられる
SG4 上層	18-3	8	磁石	6.0	0.45	0.45	3.8	縁の隅部から底部にかけて磨行
P001	18-2	8	磁石	10.5	6.85	3.0	165	ほぼ全面研磨して利用



① 小坂井運輪遺跡3調査区全景（西から）



② 1号住居跡カマド（東から）



③ 1号住居跡貼床検出状況（東から）



④ 1号住居跡完掘状況（西から）



⑤ 2号住居跡主柱穴検出状況（南から）

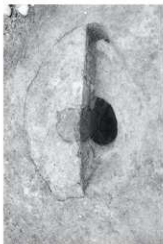
図版2



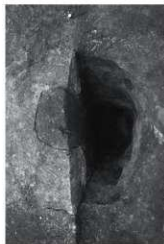
⑤ 2号住居跡貼床掘出状況 (南から)



⑥ 2号住居跡完掘状況 (西から)



④ 2号住居跡P-4土層断面 (北から)



② 2号住居跡P-2土層断面 (東から)



③ 2号住居跡P-3土層断面 (東から)



① 2号住居跡P-1土層断面 (東から)



① 4号住居跡趾床検出状況 (南から)



③ 4号住居跡完推状況 (南から)



② 4号住居跡遺物出土状況 (南から)



④ 5号住居跡趾床検出状況 (南から)

図版4



① 5号住居跡完掘状況（南から）



③ 7号住居跡貼床掘出状況（北から）



② 6号住居跡完掘状況（西から）



④ 7号住居跡完掘状況（北から）



③ 11号住居跡完掘状況（東から）



④ 1号掘立柱建物跡P-1土層断面（南から）



① 8号住居跡灰床検出状況（西から）

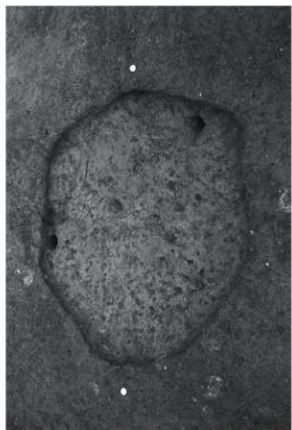


② 10号住居跡完掘状況（南から）

図版6



①1号掘立柱建物跡完掘状況 (北から)



③2号土坑完掘状況 (北から)



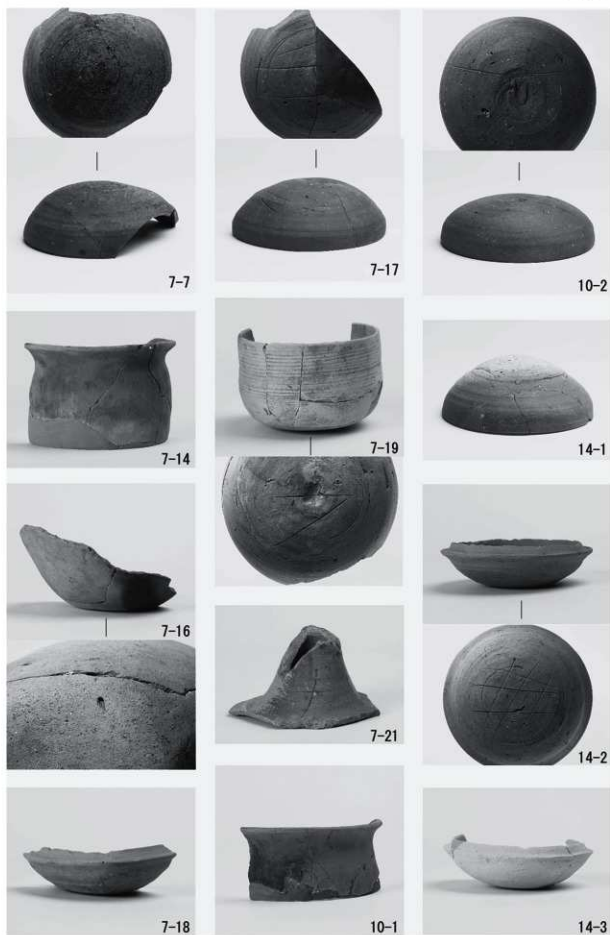
②1号土坑完掘状況 (北から)



④2号溝完掘状況 (南から)

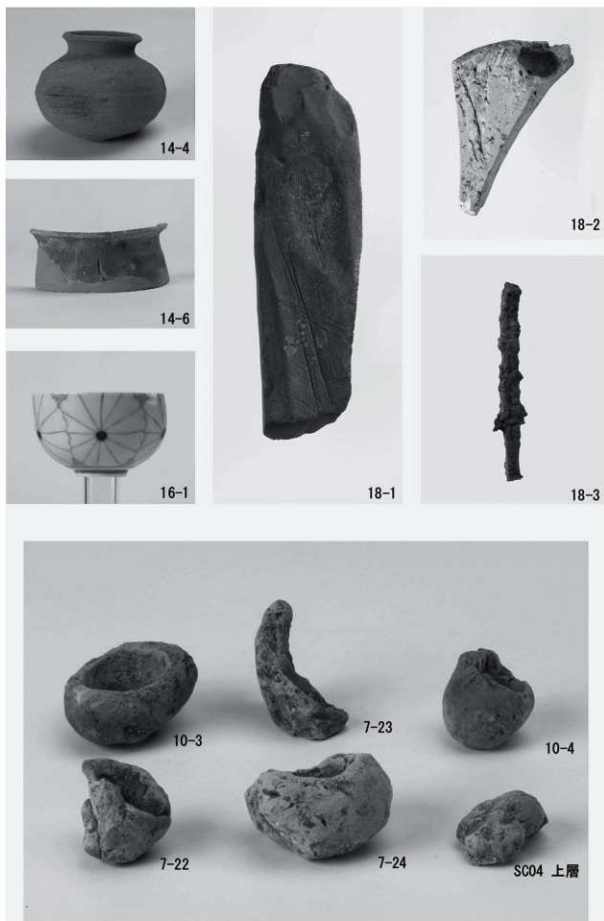


⑤3号溝完掘状況 (南から)



出土遺物 (1)

図版8



出土遺物 (2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	こいたいはすわいせき 3							
書 名	小板井運輸遺跡 3							
副 書 名	福岡県小郡市小板井・稲吉所在遺跡の調査報告							
巻 次								
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 273 集							
編 著 者 名	姫野 久恵							
編 集 機 関	小郡市教育委員会							
所 在 位 置	〒 838-0198 福岡県小郡市小郡 255-1 ℡ 0942-72-2111							
発 行 年 月 日	2013 (平成 25 年) 3 月 29 日							
保 管 場 所	[写真・図面・遺物] 小郡市埋蔵文化財調査センター							
保管場所所在地	〒 838-0106 福岡県小郡市三沢 5147-3 ℡ 0942-75-7555							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡 番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
こいたいはすわい 小板井運輸 遺跡 3	おごおりし 小郡市 こいたいは 小板井 いなよし ・稲吉	40216		33° 23′ 21″	130° 23′ 21″	2011.7.23 ～ 2011.9.30	240 m ²	集合住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小板井屋敷 遺跡 3	集落跡	古墳	住居跡・掘立柱 建物・土坑・溝		土師器・須恵器・鉄器			
<p>小板井運輸遺跡は小郡市を南流する宝満川西岸の低台地縁辺部に位置する。検出した遺構は古墳時代後期のものを主体とし、調査区内の遺構密度は高い。既調査地とともに、低台地状に展開した集落の一部であると考えられる。</p>								

小板井蓮輪遺跡 3

—小郡市小板井・稲吉所在遺跡の調査報告—

小郡市埋蔵文化財調査報告書第 273 集

平成 25 年 3 月 29 日

発行 小郡市教育委員会
福岡県小郡市小郡 255-1

出版 片山印刷株式会社
福岡県小郡市祇園 1 丁目 8-15

